

So, we talk about hiring people. We want to embrace diversity.

採用の話ですね。ぜひ、「多様性」を大切にしてください。

We want to- (絶対) ~した方がいい、するべき

やまと言葉

直訳すると「私たちは～したい」という意味になりますが、これは英語で「～した方がいい」というアドバイスの表現として使われる非常に慣用的な表現です。You want to- / You may want to- / You might want to- と、助動詞を変化させることで強さを調節することができます。ここでは助動詞のクッションなしに You want to- で来ているので、かなり強い「～すべき」「絶対～した方がいい」くらいの響きです。

ちなみに、「～した方がよい」と言いたい時に多くの日本人の方が You had better... を使っていますが、これは「さもないと～」が隠れた表現で、多くの場面では不適切な響きになってしまいます。普通に社会人がアドバイスとして「～した方がいいよ」という時には、この表現がもっとも適切です。ゴルフ教室や、その他の教室番組を見ると、You want to- / You don't want to (～しないように)の表現が大活躍しています。

to embrace 積極的に受け入れる

やまと言葉

「抱擁する」がもとの意味です。そこから「いいものとして積極的に受け入れる、心から受け入れる」という意味で使われます。ここは「多様性を、問題を引き起こすマイナスなものとしてとらえるのではなく、いいものとして受け入れ、大切にすること」といった意味になります。

diversity 多様性

やまと言葉

アメリカの文化のコアにある価値観です。人種、宗教、性別、その他いろいろな面で多様な人を抱えることをプラスとする価値観です。現実には簡単ではなく、色々な課題、衝突、差別が存在するわけですが、アメリカでは多様性を「プラスと見る」という価値観を選択しようとする強い意志があります。

That means we want to welcome differences. Please welcome the differences.

つまり、「違い」というものを歓迎するということです。ぜひ、「違い」を歓迎してください。

That means ... つまり...

パターン構文

前に述べたことを that や this で受けて、「それがどういうことを意味するかというと...」と説明するときのパターンです。イメージは「= (イコールマーク)」です。

ロジック

That means ... は今まで述べてきたことを、より具体的に、明確に分かってもらうために、具体的な例や詳しい説明を挙げるときによく使われる「旗印」表現です。聞き取りでは、That means... と聞こえてきたら、頭に「= (イコールマーク)」をイメージし、後により具体的な説明や例が来ることを予測して聞き進みます。

to welcome differences 違いを歓迎する

やまと言葉

to welcome のコアは「喜んで迎え入れる」という意味です。

And the idea is not to change everybody to be kind of like robots and think the same way, but the idea is to really get everybody going in the same direction with the same intent.

ここでいう考え方は、人々を変えてロボットのようにして、皆が同じように考えるようにすることではありません。そうではなくて、要は、皆を、同じ方向に向かって同じ意図で進むようにもっていくということです。

the idea is to ... 考え方は... 趣旨は....

やまと言葉

パターン構文

the idea は「根本にある考え方 (目的、ねらい、趣旨)」といった感覚で、非常に活躍する表現です。

職場で、何か提案をする際にその狙いを強調したり、何らかのアクションを取る際に、皆の理解の方向性を確認したりする場面などでよく使われます。特に、この例にあるような肯定形と否定形を使った「×」の説明で、聞き手の理解をクリアにする場面で非常に活躍します。

ロジック

to embrace diversity 「多様性を大切にする」、to welcome differences 「違いを受け入れる」のように、概念的に、漠然と言われた場合、人によって解釈や頭に浮かべるイメージは異なる可能性があります。従って、このような概念的な言い方をしたときには、その言葉の根底にある考え方を定義したり、具体的にどういうことを言っているのかを説明したりするサポートが後ろに続くことがよくあります。この点を意識して、聞き取りでは、the idea is (not) to ... ときたところで、「根底にある考え方を具体的に説明してくれそうぞ...」という意識で聞き進みましょう

もうひとつ、意識するとよいのは、「×！(こっちはなくて)... ！(こっち!)」と「×」のセットで説明してくれる感覚です。the idea is not to...(×!) but the idea is to...(!) がその部分ですね。「×」でセットだ、という感覚を味わいながら、「こういうことではなくて...いいね、こういうことだよ!」と聞き手の理解をクリアにしながらか話してくれていることをしっかりとつかみましょ。

the idea is not to...(×!) の挿入部分では、「みんなが同じようになって、同じ考え方をするように会社が持っていけばよい」と短絡的に思っている人に対して、「いい? そういう意味じゃないからね!」と理解をクリアにしてくれています。そして、but the idea is...で「多様性を受け入れるとは=会社がみんなの違いを尊重しつつ、方向性と目標をそろえるってことなんです」と説明してくれています。

kind of like ... みたいな...

やまと言葉

kind of like ...は「...のタイプのような、...の種類のような」という意味です。何かを言い表したいときに「それを必ずしもピッタリと言い表してはいないのだけど、このような感じ」というときに使います。ここは「ロボットみたいに」の意味になります。

intent 意図、意志

やまと言葉

ある行動や言葉の裏にある「ねらい、意図、目的、意味」のことです。

So, we have to recognize the people that make up the company and recognize that everybody has different needs, they have a different way of thinking, to respect that, but be able to bring it to a conclusion, or to come to some final piece. That's the key.

ですから、会社を構成している人々を認め、人々がさまざまなニーズをもって、さまざまな考え方をもっているということを認めて、それを尊重する。でも、それをひとつの結論、ひとつのなんらかの「まとめ」にもっていけるようにしなければいけない、ということです。これがカギです。

So, ... ですから...

ロジック

So, は今まで話してきたことをまとめ、一番言いたいこと(メインポイント)を再度言うときの「旗印」表現でした。聞き取りでは、So...と来たら、「言いたいポイントをもう一度言ってくれるぞ...」という意識で次を待ちましょ。

to recognize ... 認めて受け入れる

やまと言葉

to recognize は「目の前のものを、しっかりと頭の中で認識して、受け入れている」感覚です。

a (different) way of thinking (異なる)考え方

パターン表現

a way of ...ing のかたちで「...の仕方」、「...方」の決まった言い方です。多くの場合、wayに何らかの修飾がついて使われます。

our way of working 私どもの働き方

an effective way of encouraging people 効果的な励まし方

respect 尊重する

やまと言葉

respect は辞書などで「尊敬」と訳されていますが、コアの意味は「重いもの(価値がある、大切なもの)としてみる」です。ここから派生して、コンテキストによっては「相手の優れた面に対する尊敬」「礼儀」「尊重」のような理解がしっくりときます。respect that の that は前に述べてきたことを指し、「人それぞれ、さまざまなニーズやさまざまな考え方があるのだということを、価値のあることとして尊重す

る)のような意味になります。

but でもそれよりもなによりも～

やまと言葉 but は「逆接」と説明されていることもありますが、「逆接」だと思っているとすんなりと意味が入ってこないことが多いです。But は、「but の後ろにスピーカーが言いたいポイントがくる」というのがコアの感覚です。イメージとしては、「ここから言いたいこと！」と but の後ろにスポットライトがパッと当たっているイメージです。この部分は、but の前で言っている「皆の違いを尊重しなきゃならない」というメッセージに対し、それと一見相反するような、忘れられそうな概念を「同時にこちらが重要です」と特に強調している感覚です。

ロジック 前半部分も the idea is not ... **but** the idea is ... で「挿入 **but** メインポイント」、So 以降後半部分も、we have to recognize **but** be able to ... といったりかたっています。そのポイントは、「会社が“多様性を受け入れる”場合に、会社が皆の考え方をえるようにもっていく」ということであると短絡的に思ってしまうはいけませんよ、と言っているということです。「多様性を受け入れる」＝「皆の違いを尊重する。それをやりつつ、方向性や目標をそろえる」ということだと強調しています。

to bring it to a conclusion ひとつの結論にもっていく

やまと言葉 it は、話の流れから「ひとそれぞれ異なるニーズや考え方をもっているという、その状況」を指していると考えとよいでしょう。その「本来ならばばらな状況」を、方向性や目標を示すことでその都度、生み出すべき、到達すべき「結論にもっていく」ということです。

ロジック to bring it to a conclusion と次の to come to some final piece は、「具体的に組織がどういう状態なのか」にイメージがなかなか浮かびにくいところですが、ロジックを意識することで、随分と意味がつかみやすくなります。具体的には、So, we have to ... 以下を聞きながら、so 以下が前半の「挿入 **but** メインポイント」と同じような話の流れで再度まとめてくれている部分だということがつかめれば、but be able to 以下は、前半の but the idea is 以下 to get everybody going in the same direction with the same intent と同じような内容を言っているのだらうという読みができます。

to come to some final piece なんらかのひとつの「まとめ」になる

やまと言葉 「最終的にはひとつのまとまった状態になる」ということですが、「組織」についてのコンテキストですからそのイメージとしては、「社員がバラバラな方向を向いている状態ではなく、組織としてのビジョン、目標、方向性に沿って、その都度、最終的に意見がまとまったり、皆が納得して一丸となれる」状態です。

That's the key. それがかぎです。

パターン表現 前で話してきたことを that で受けて、「で、これが...なんです」という決まった言い方です。That's the key は日本語でも物事をねらっている方向に進める上で、決め手や突破口となるような重要な要素について「これがかぎです」と言いますが、それと同様の意味です。

ロジック 「で、これがかぎなんです」と、前で言ってきたことの重要性を後ろからグッとねじ込んでくれている感覚を味わいましょう。